
テストの朝

ホチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テストの朝

【Nコード】

N2234I

【作者名】

ホチ

【あらすじ】

今朝のストレスはテストだけじゃない、あいつのせいだ。

「うゝ」

これで三日連続だ。テストの朝は決まってお腹を下してしまう。我ながら自分の腸の弱さが嘆かわしい、ストレスにさらされるとすぐこれだ。

いや、テストのストレスだけじゃないな。

昨日のテストが終わった後、あいつ——有希子の思わせぶりの発言のせいだ。おかげで勉強が手に着かず、数学がかつてないピンチに陥っている。

有希子の奴、一体どういうつもりなんだ「テスト終わっても教室から出ないで待っていて」とは。よりによって中学三年男子に向かって！この年頃でそういう発言を勘違いしない男子はいやしないぞバカヤロウ。

本当にこういうつもりなんだろう。有希子とは小さい頃から家が近所で中学三年間はずっと同じクラスだった。もちろん、仲はすこぶる良い。だけど互いに恋愛対象としては見ていなかったはずなのだけ。

せめて今日のテストが終わってから言って欲しかった、今日で三日間のテスト日程が終わるというのに最終日を待たずしてそんなこと言うなよな。

マズった。今はそんなことを考えている場合ではなかった。これからテストなのに。僕は下痢止め（効果抜群）を飲んで急いで家を出た。

幸い学校までの道のりはテスト勉強に集中できた。とはいっても所詮付け焼き刃程度になってしまったが。

テスト前はもう駄目だと思っていたが、終了のチャイムが鳴り終わったときの感想は「以外に出来た」だった。

ただし、数学だけは本当に終わった。五十点を切ることだけは確

信できる。ここまでできないと妙に清々しい。
テストは終わった。次だ、有希子の件だ。……一応トイレに行っておくか。

教室でぼんやりしているうちに、いつの間にか教室内は僕一人になっていた。

僕一人？有希子もないじゃないか。まさか騙されたのか？
あの野郎、と思っていたところに有希子が教室に戻ってきた。

「なんだよ、帰ったのかと思ったよ」

「友達には忘れ物したって言って戻ってきた」

「ふうん、それで用って何さ」

有希子がたじろいだ。

「いきなり訊くんだね」

「だってそれを言うつもりで僕のこと呼んだんだろ」

「それはそうだけどさ……」

「それで何さ」

「……………」

「どうした？」

「あたしね、転校するの」

「え……」 血の流れが止まった気がした。 「冗談じゃ」

「ないよ」 有希子は静かに答えた。

「そうか……いつ？」

「二週間後」

目の前が真っ暗になった。

「急だな」

「うん」

「どこ行くんだ？」

「そんなに遠くない、県内だよ」

「それならっ」

——ここにも通えるんじゃないか？

「片道二時間」

僕の言いたいことを察して有希子は先回りして答えた。

「二時間か、それじゃあキツイな」

「うん」

「そうか……みんなには？」

「言っていない。お別れ会とか開かれても嫌だし。だからみんなには内緒にして。ギリギリになったらあたしから話すから」

「わかった」

「アンタにだけは言っておきたかったんだ。小さい頃からずっと一緒だったわけだし」

「そうか、ありがとな」下を向き床を見つめた。

深く息を吸ってから顔を上げると、有希子がしゃくりだした。

「おいっ、泣くなよ」

「だって……」

あとは何を言っているのか聞き取れなかった。

どうすることもできずに立ち惚けていることしかできない自分もどかしかった。

「そうだ。受験はどうするんだ？志望校も変えちまうのか？」

ようやく落ち着き、鼻をすすりながら「変わらない」とズビズビ言いながら答えた「そこなら通えるから」と。

「それじゃあさ、高校でまた会おうよ。それなら問題ないよ、半年もない」

「アンタの頭じゃ無理よ」

「そりゃ今のままならな。だけどこれから死ぬ気で勉強する、受かってみせるさ」

「本番弱いくせに」

有希子は僕がすぐお腹を下すことを知っている。

「そこも治す」

「本当にできるの？」

「だからやってやるって」胸を叩いた。自信はないが。

「それじゃあ約束して。今日から毎日三時間欠かさずに勉強するって」

「三時間！？多すぎない？」

「受かりたいんでしょ。アンタの頭じゃそれでもたぶんギリギリのところよ」

「ひっでーな」

「だって本当のことだもん。アンタの成績小学校の頃からずっと見てきたのよ？」

「有希子が言うならたぶん本当なんだろうな……わかった、約束するよ。毎日三時間勉強する」

「欠かさず、ね」

「わかったってば」

「よろしい」

いつの間にか有希子は笑顔に変わっており、僕は安心した。

「準備とかいろいろ忙しいと思うけど、引越するまで僕の勉強見てくれない？有希子教えるの上手いし」

引越してしまうまでの間、少しでも長く有希子と一緒にいたいと感じた。長い時間を共に過ごしてきたせいなのか、有希子がいなくなると思うと体の一部が欠けたような気分になった。

「いいわよ。だけどウチはごたごたしてて散らかってるから勉強はアンタの家でしましょ」

「僕の家か。別にいいけど久しぶりだよな。いつ以来だろ？」

「小学校四年のときくらいだった」

「そうかも。母さん喜ぶよ」

「遊びに行くんじゃないんだからね。みっちり叩き込んであげるから覚悟しときなさいよ。アンタをあたしレベルにまで引き上げるなんて相当な骨よ」

「覚悟しとく」

「そう、それじゃ早速行きましょ」

「えっ、今日からなの？」

「当たり前じゃない、何言ってるの」

「だけど今日はやっとテスト勉強から解放された日だからさ」

「今回のテスト範囲も寝たらどうせすぐに忘れちゃうでしょ。忘れないうちにまとめときましょ」

「勘弁してよ」

「勘弁しない。あたしと同じ高校に入りたいんでしょ」

「そりゃそうだけど……」

「なら今日からしましょ。あたしも勉強しなきゃ。余裕みせてあたしが滑ったら洒落にならないもの」

「そりゃそうだな。よし、それじゃあウチで勉強しますか」

「おー！」

ようやくいつもの元気で明るく、ちょっぴり毒吐く有希子に戻ってくれた。

家に帰る途中訊いてみた。

「僕が有希子の志望校にいくって言ったとき嬉しかった？」

「べっつに〜？ アンタの方があたしがいなくなるの知って寂しくなったんじゃないの？」

「僕は寂しいなんて一言も言った覚えはないね。それに……泣いたくせに」

「――あれは！」

僕が有希子の狼狽した姿を見てニヤニヤしていると、それに気が付いた有希子が冷たく笑った。

「本当にアンタ覚悟しておいた方がいいかもね。泣いて許しを請うまで今日は徹底的にしごいてやるから」

僕の背中に冷たい汗が一筋流れた。

と同時に、有希子と二人で思わず吹き出してしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2234i/>

テストの朝

2010年10月15日07時42分発行